

拜啓 新村出様

柳田国男書簡からみる民俗学史断章

菊地 暁

Dear Izuru Shimmura : Fragment of History of Folklore Studies Seen in Letter of Kunio Yanagita
KIKUCHI Akira

- ①はじめに—方法としての京都
- ②書簡概要—重山文庫と新村文庫
- ③書簡管見—民俗学史断章
- ④おわりに—新村と柳田の「くされ縁」

〔論文要旨〕

従来の「民俗学史」が抱えてきた「柳田中心史観」「東京中心史観」「純粹民俗学中心史観」ともいうべき二連の偏向を打開すべく、筆者は「方法としての京都」を提唱している。その環として本稿では国民的辞書「広辞苑」の編者・新村出（一八七六—一九六七）を取り上げる。新村は柳田国男と終生親交を結び続けたが、その学史的意義が正面から問われたことはこれまでなかった。その理由の一端は、両者の交流を跡づける資料が見つからなかったことによるが、筆者は、新村出記念財団重山文庫ならびに大阪市立大学新村文庫の資料調査から、柳田が新村に宛てた五〇通あまりの書簡を確認した。これらは便宜的に、a) 研究上の応答、b) 資料の便宜、c) 運動としての民俗学、d) 運動としての方言学、e) 交友録、に区分できる。これらの書簡からは、明治末年から晩年に至るまで、語彙研究を中心とした意見交換がなされていること、柳田の内閣書記官記録課長時

代に新村が資料閲覧の便宜を得ていること、逆に柳田が京大附属図書館長の新村に資料購入の打診をしていたこと、柳田が「山村調査」（一九三四—一九三六）の助成金獲得にあたり、新村に京大関係者への周旋を依頼していること、一九四〇年創立の日本方言学会の運営にあたって、研究会開催、学会誌発行、会長選考、資金繰りなど、さまざまな相談していること、等々が確認される。こうした柳田と新村の関係は、一高以来の「くされ縁」と称するのが最も妥当なように思われるが、その前提として、「生ける言語」への強い意志、飽くなき資料収集、言語の進歩への楽観、といった言語認識の基本的一致があることを忘れてはならない。さらには、二人の関係が媒介となつて、京大周辺の研究者と柳田民俗学との交流が促進されたことも注目される。

【キーワード】柳田国男、新村出、京都、言語、書簡